

3. 萩焼のふるさと

陶芸の「長門深川」 1998. 1. 19.



fukawalprint.htm



長門深川 萩焼の里 1998. 1. 15.

美祢から316号線美祢ハイウェイを大峠・美祢トンネルを抜け、湯本温泉の街の手前の谷を 西にはいると萩焼発祥の地である『長門深川』の郷に入る。

伊万里焼の里『大内山』がそうであるように川を挟んだ山に突き上げる細い谷の両側に登り窯 など陶芸の家並みが緑の木々の中にひっそりと広がっている。実に伊万里の郷 大内山の谷あいとよく似ている。



長門深川 萩焼の里 1998. 1. 15.



長門深川 萩焼の里 1998. 1. 15.

萩焼は『一に楽、二に萩、三唐津』と呼ばれる茶器の名陶である。

李三平一族が韓国から伊万里へ連れてこられ、その流れが萩へ伝わり『長門深川』の地と『萩の地』でほぼ同時に萩焼が始まったといわれる。萩の街が観光客で喧騒な街になっているのに対し、深川の郷は緑につつまれた静かで落ち着いた美しい家々を並べている。常々出掛けてみたいと思いながら訪れることが出来なかったのですが、テレビで紹介されたのを機会に家内と二人で出掛けた。

緑の中に日本の古い故郷を思わせるすばらしい作陶の家並みが狭い谷をバックにひろがっていた。本当にお勧めの萩焼の里である。

1998. 1. 19. 美祢にて by M. Nakanishi

長門深川 萩焼の郷 -2-

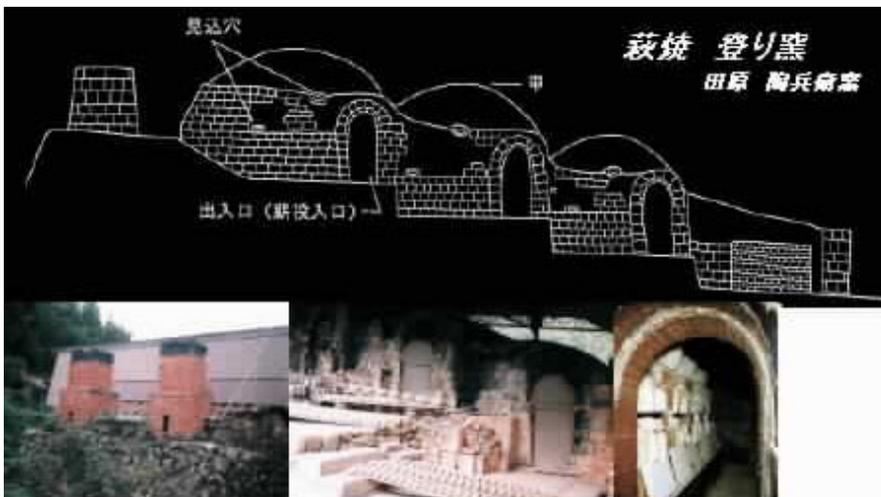
田原陶兵衛さんの工房

長門商工会議所青年部ホームページより

www.joho-yamaguchi.or.jp/ncci-yeg



田原家は、李勺光の高弟として共に広島から萩に移住し、松本の御用窯を始めた松本ノ介左衛門を始祖とし、三之瀬（長門市）焼物所開窯者の一人、赤川助左衛門として代々、赤川助左衛門を称して藩の御用を勤めてきた。幕末、八代目、喜代蔵の時、縁あって嫡男謙治が田原姓を名乗り、陶兵衛を称することとなった。



一楽、二萩、三唐津」と賞される茶陶、中でも萩焼は使う人によってその味わいが深みを増し、美しく変化するといわれる。最初に貌を作るのは陶工であるが、その物を完成させるのは使い手である
陶兵衛は「窯変文」シリーズで独自性を発揮しているが、目指すのは伝統の茶陶。

代々研究を重ねて受け継がれてきた灰被りの茶陶や、唐津で学んだ「皮くじら」の技法を萩焼に融合させ独自性を表現している。だからといって先達の心技を否定するのではなく、伝統の姿と代々の精神を受け継ぎながら自らの十三代陶兵衛の萩焼を築こうとしている。

現在は個人で窯を所有しているので3～4袋位だが、昔は共同窯であった。10袋を有する古窯が深川三之瀬の谷には残されている。



窯の中を焚口から覗いてみる。余りに強く眩い光のため思わず目をほそめてしまう。陶工が意図した、或いは全く意図していない現象がこの中で起こっている。これが窯変（ようへん）なのである。

窯の中の焼き具合を、予め入れておいた色見（ぐいのみ状の物に穴をあけたもの）を見込穴から取り出し確認する。

焼き具合が良ければ、窯焚きを止める。

窯出しは、火を止めて通常2～3日置いて自然冷却させたのち行う。

陶工たちは期待と不安の中で窯出しの時を迎える。

長門商工会議所青年部ホームページ より

www.joho-yamaguchi.or.jp/ncci-yeg

萩焼のふるさと陶芸の里 「長門深川」

〔完〕

1998. 2. 1. 美祢にて by M. Nakanishi